

令和5年度第2回岐阜県動物愛護推進協議会 議事概要

<日時>

令和6年2月28日(水) 13:30~15:20

<場所>

岐阜県庁舎14階 1406会議室 (Zoomによるオンライン併催)

<出席者>

(公社)岐阜県獣医師会会長 柴田真治
岐阜大学応用生物科学部附属動物病院長 渡邊一弘
(一社)岐阜県動物愛護ネットワーク会議代表理事 糸田恵子
岐阜市保健所生活衛生課長 藤井研一
岐阜市保健所生活衛生課動物管理指導係長 小林佳子
岐阜県動物愛護センター所長 渡辺満夫
岐阜県健康福祉部生活衛生課長 佐橋勝己
岐阜県健康福祉部生活衛生課 岩平久志、古田直子

<議題>

議題1 岐阜県動物愛護管理推進計画の進捗状況について
議題2 飼い犬による咬傷事故防止について
議題3 多頭飼育崩壊に関する獣医療費支援について

<議事>

【議題1】

資料1により事務局から説明。

委員からのご意見

・子猫のミルクボランティアについて、詳細な状況は不明だが、時期によっては一人一人のボランティアの負担が大きいとも聞いている。地域偏在があるのであれば、その地域へ重点的に啓発するなど、啓発の方法を工夫してはどうか。

→(事務局回答)当課としても課題として受け止めており、さらなるミルクボランティアの拡充に努めたい。なお、令和6年1月に県内各地域のフリーペーパーにてミルクボランティアの募集を広報したところ、多数の応募をいただいている。

【議題2】

資料2により事務局から説明。

委員からのご意見

- ・人気犬種である柴犬は、飼いにくい犬種という実感がある。犬種の特性や咬まないためのしつけについて、これから犬を飼う人に対して教えていく必要がある。
- ・狂犬病予防法に基づく犬の登録や、狂犬病予防注射の毎年の接種を受けさせていない飼い主がおり、それらの基本的な飼い主の義務を守らせることが必要。基本的な飼い主の義務を果たしていない人は、咬傷事故防止にも取り組まないのではないか。
- ・日本では、特定の犬種が流行することがあり、その特性を理解せずに飼い始める人が増える。また、繁殖業者も、流行の犬種では気性についての血統を考慮せず繁殖する。飼い主は、自分の飼い犬の特性や犬が咬むことの重大性を理解する必要がある。人ではなく犬を咬む事例もあり、その場合でも今後は人を咬む可能性があることを飼い主が認識する必要がある。
- ・事故件数を減らすためには、今後も様々な機会をとらえ、咬傷事故防止の啓発を繰り返し行っていくしかないのではないか。一方で、今後も事故件数が増える場合は、条例による規制強化なども検討してはどうか。

【議題3】

資料3について岐阜県動物愛護ネットワーク会議から説明。

人と動物が共生する社会の実現に対する予算の用途について、事務局から説明。動物愛護管理推進費、動物愛護センター活動費、ミルクボランティア育成事業費など、動物愛護管理施策の推進に活用する。

委員からのご意見

- ・県の犬猫引取手数料の減免制度は、多頭飼育崩壊への対応策の1つとして有効ではあるが、制度の啓発が不十分で、当事者や相談を受ける動物愛護団体に浸透していない。
- ・県が犬猫を引き取ることについて、飼い主は「保健所＝殺処分」との思いがあり、抵抗がある。県が引き取った犬猫を適切に譲渡することの理解が深まれば、引取りに応じる方が増えるのではないか。

(15:20 閉会)